

## 第11回 明治大学文学賞

### 阿久悠作詞賞受賞作品について（三田 完）

（全体講評）

今回は昨年を上回る応募がありました。明治大学文学賞に在学生在が寄せる関心が高いことを喜ぶとともに、全体的なレベルの高さも感じました。自分の胸の中にある思いを言葉にする——という点で、ほとんどの作品が及第点に達していると思います。さらに、その言葉を歌いたくなるかどうか——という視点で作品を絞り、大賞1篇と佳作2篇を選びました。

さて、歌いたくなる詞とはどういうものでしょうか。

明治大学出身で昭和を代表する作曲家・古賀政男は晩年、こんな言葉を遺しています。

「詞の裏の意味を考えてあげるのがメロディーをつける人の責任ですね」

流行り歌の詞は作者の思いの丈をすべて語り尽くすものではない。だからこそ、作曲家や歌手、さらにそれを聴く人たちの想像や共感が加わり、結果、歌は大きく膨らんでいきます。つまり作詞とは、ただ言葉を紡ぐのではなく、そこに読む者の思いが忍び込む〈隙間〉を作ることでもあるのです。

歌いたくなる詞を作るテクニックは、阿久悠の著作『作詞家入門』（岩波現代文庫）に網羅されています。次回以降、阿久悠作詞賞に応募される方には、ぜひ一読をお勧めします。

(受賞作品講評)

【大賞】

No. 1073 『金木犀』

10月のある日、町に突然甘い香りが流れます。季節の〈旬〉を失った都会人も、金木犀の香りの混ざった風に秋を感じます。

芳香でありながら、それは度を過ぎると頭痛をもよおす不吉なものでもあります。気分を浮き立たせるとともに鬱陶しくもある〈恋〉に似ています。

そんな金木犀をモチーフに少女が恋を知る過程を綴った本作は、シンプルでありながら、描かれていないことをあれこれ想像させる作品でした。寺山修司が書く詞に似て、〈怖さ〉も言葉の背後に感じました。

読む者それぞれの頭の中に、さまざまなメロディーが浮かんでくる、作詞賞にふさわしい作品です。

## 【佳作】

### No. 1024 『夜勤』

朝6時と夜10時にカウンター越しに毎日向き合う男女。コンビニエンスストアというきわめて日常的な場所を恋の舞台にしつらえた本作に、さながら地下の小空間で演じられる演劇を見るような面白さを感じました。

惜しむらくは、『夜勤』タイトルがせっかくのドラマの艶を消してしまったことです。タイトルは流行歌の成否を決します。たとえば、『会話』というタイトルの歌は聴く気にならなくても、『立ちばなし』だったら聴いてみようと思う。

タバコや弁当のほかに、ほとんどの客は気づかなくてもなぜかカウンターの近くにある不思議な商品——そういった〈盲点〉を作者が一つ掬い上げ、想像たくましくドラマの小道具に用いていたら、もっと魅力的なタイトルがつけられたのではないのでしょうか。

### NO. 1097 『2020 TOKYO音頭』

快作であり、怪作です。この詞を読みながら、以前、渋谷駅の近くで般若心経をラップで歌っているグループをみかけ、非常に興味を惹かれたことを思い出しました。

オリンピック、パラリンピックの開かれる2020年の東京をファンキーにシャウトしてほしい——そんな狙いの課題に4人の方が果敢に挑戦してくれました。その中でも、ぜひメロディーをつけて聴いてみたいと思ったのが本作でした。理屈ではない、投げつけるような言葉が列なっていますが、韻律が考えられているので快感があります。